

森の宮遺跡

大阪市教育委員会

森の宮遺跡は、大阪市中央区森ノ宮中央二丁目にある森ノ宮ピロティホールを中心として付近一帯に広がっています。遺跡は南北に長くのびる上町台地の東北端の斜面にあり、今から約5000年ほど前の縄文時代中期に人が住み始めました。この地点は、今から4000年ほど前の縄文時代後期頃、東には豊富な海の幸を蓄えた内海（河内湾Ⅱ）が、西には豊富な山の幸を蓄えた森が広がる生活に大変適した場所でした。この河内湾は長い年月を経て徐々に淡水化し、今から約3500年から2000年前の縄文時代晩期から弥生時代中期頃には、潮の満ち引きによって海水が出入りする潟となり、さらに1800年から1600年前には淡水の湖へと変化したと考えられています。

この内海から湖への変化を示す証拠が森の宮遺跡の発掘によって確かめられました。森の宮遺跡でみつかった貝塚の調査では、縄文時代後期は海にすむマガキが食べられ、弥生時代には淡水にすむセタジミが食べられていたことがわかったのです。このマガキ→セタジミの変化は河内湾→河内潟→河内湖という河内平野の形成過程を明らかにするうえで貴重な資料となっています。

また、これまでに建物の跡は見つかっていませんが、9体の^{くつやう}屈葬人骨がみついているのをはじめ、さらに東の調査では^{いかりいし}碇石と考えられる縄をかけた石や漆塗りの櫛などもみつかっています。

縄文時代の地層の上には、弥生時代から古墳時代、難波宮の時代、さらに中世から豊臣時代の地層が連続して存在しています。このように、森の宮遺跡は大阪の歴史を解明するうえで大きな手がかりを与えてくれる遺跡といえます。

参考文献 難波宮址顕彰会 1978 『森の宮遺跡 第3・4次調査報告書』

(財)大阪市文化財協会 1996 『森の宮遺跡』Ⅱ

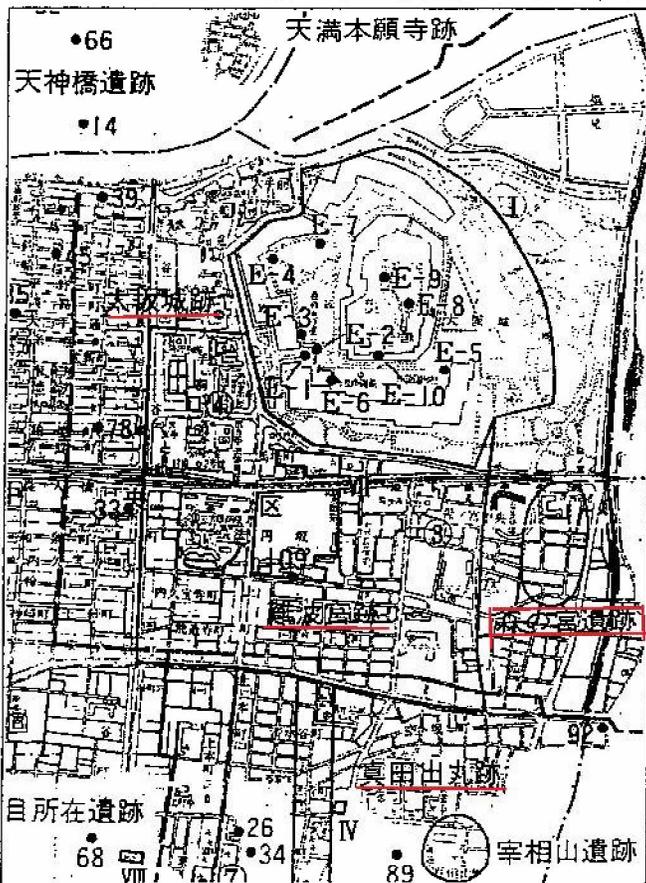


図1 森の宮遺跡の位置 (S=1:20000)

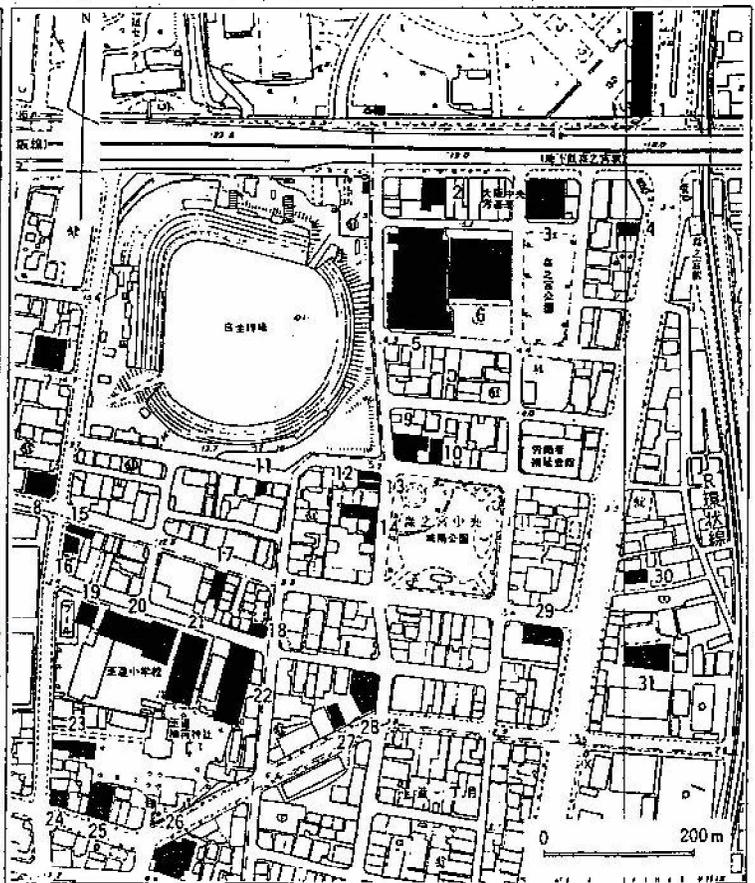


図2 これまでの調査地点